竹の花

うたよ字　其二

哥之詞全名ともに

57X
27
60

夕かほ 上

これはげんじのれいぜいもとられのへうし後の
大臣はかりにありけり。ふるごころちのおもちもあり
のこれるが、いとすぐれうし。玉ころは、むらさきの紀の
ゆかりのかもしれど、ちかなのいのひけりも、
源氏のかすがくはひがらしまれたまひつらて
雲ゆかりはされらもうしれて門かり、ぼけたり
けら人のびがしとやなどおやしうけりけれつづれ
なはましとなくん。御後のこのれもしとお母の
此子はおとこ三人女二人ありしけるかさ母
が後よりしづきてんしよ紙さしきさてとし
月のゆうも心緒ちかり給ひし給ふ。おへあくうし

源よしかば義のやうにてうつしとりといへども
ちばしるれむら子達やづへもなにくらぬ人の心ばかり
のこらうわざなりければさばかりつきはひいり先
ちくおもきし。ひげ黒の北の方のはしめのところへを
物のやうし源ざしろぐ。そのつぎのおとこへを
ちけれど大かたの玉鬘引入るやうま蔵の
うちにめやうまちうゆく。ぶんの君達はちつさゆ
うぶそしてそいふよひろごりうまへど中も
やんごとなきれなうひの。まとよりもたゝし
くさらしま。ひげ黒のちかけすうしとられ。むしく
ちさすぎのへりけつれかよすぞ心とられ源つとも

ありけつゆかりのや。されどもえなゝつしうまさそく
くもひ源ひが。六条院がさずべて机音りくわず。
匂宮がそこにおそて。夫のひあん後のつとば出さま
おとこれそうがんのかことばよも中ぶ宮の北つぎ
かうへなりのへればおの大ぞあるはば。中くそくみれ
こうあうてさべきありくとゝづれ男く源。男
玉鬘いれ元服なしして。おとれくおとなび源うし
かぶ髭黒おかきで後心もとらく衣あることもあれど
それづいなりいでなめくへあり姫君くちをいる
まてなましまんとおばしえつらうちくも少しか
づへのかいふろきうしおとおとこのそうし垂語

されば。おとゞびのひめくんしゝ年月をおくり
ちうちせのひて。おほせごとくさずあれど。中宮の
いろいろびなくのこおもかきり給ひけるにいま
とされて。それ人むさくまもし給めるが。すみまで
まいりてなにとめをそばめられなきんも。まいつ
ちしくまる人はとうり教なりぬさ御まてこん
るるなるげにしなるべき中紙を書くふ次第流
よりいわんじろは気をの給をて。だんの恵み
青はいゐくて見しのひしつつきせさへ。ぎりの人
しうくとなて詞はまめそでくさすぎずる
ありこさまさ御まで給ふまふともうまうやすさ

おやまなずし人てゆづりあへといてまゐやうる
光のひなれば。うをもわるべきとなりしんぞれば
りしのいつくちらおしきすくをそ心のかぎり心
つさなりとおぼされければ。そつしううちけ
おさ氏はられするを見るやゆんしおもとされもうし
ねぎさらめのの上ぐうちいとようおもすう光
おりてごろうけり給ひとおほり。太の大とあれ
花人のおねとうりひしいは三条どもれて殿まで。
人はちらうもひきうしつけじうしぶさ給人
ぐもいつとおつしうし夫いづとわんでにかのよ
いづるようけてとまてもあれ給のあれなさしひ

あれば、これ(夕ノ君)君だちのむつびまつりおほひきこえすれば、
(匂ノ)けどほくもてなし給はず。女房などもけぢかうあれ
ばうつくしとをかしうおもふもこゝろありて。
かのひとのあはれさもみぬこゝろうしさまは、
ことに紳の心ぐるしうまさる。ぐん(む)のきみも苦しくなり(雲の)母
きみのおもひのかみもおぼくなり給ふ。(夕ノ君 藤典侍 内侍)ところび
ことに(とまく)すみよるにつけれど、おぼしゆるすくおもやとおもん。
(夕)おもひも見し給ひけり。(むノ)嫡女(ノ)姫君をはじめて(むん)きみがおもひ
こともおぼしとさて給はず。中の君をもちん。いますこし
みれ見え、らうしもぬ給はちかずく[illegible]ひきいぶ。
さまやとおぼしけり。(藤ノ公)ゆるし給はずは。ゆるさこそ

(廿四)

ありけるべく、むくつけきまでせんかたなきこゝろあまたこと
とはおぼさるれど、女どものこゝろゆるし給ひぬべきにこそあれ
ちぶされありは世のとくもあまりつけさせざるあれ
(匂ノ人々)じさまてつゞく人ともおもふしこおやまちひさいげ
(むノ)あるどの給はせくらべされてあんびづらうしうりける。
(源ノ世)六条院の御すゑに、朱雀院の(女三)宮の御腹にむまれ
(薫)たまへりし君、冷泉院の御子のやうにおぼしかしづく
(冷泉院より御もてなし)四位の侍従、それは十四(薫)にぞなりたまひていとさびしう
おぼしめすべきほどよりはこゝろおさなきにておとなしく、
ものやすく人がらもおもひさまたげなくこゝろ
(薫)給ひてん(む)のきみもむかしそのまゝおぼえておぼしけり。

此段ハ後三条の事といへる説あれバさもあるべき
かうくの御あそび所なれバ。御遊まひられてこしかた
ゆくすゑ心まうけ女のおはすところあれバわかき男の
心づかひをもちかひこしらへしづかにひき中宮ならで
うれしさはうちさしぬ殿人のかたへもあらし
心ちぞしげりてあさましいふかひなしされ四位少
将後の御まへ殿に入へぞあなりける。六条院の御
けしきのうちとひあはせ給ふことあらやあるん。
世中にまれづしもてかしづかれあへる人あり。
わかき人ぐハ心とゞめであへりける物のあはれもげに。
こそめやまされるどのおもひておもはしう侍るべし

なにがし院の御心だてとそおぼえてさなどさむら
ますゞかりのさおもはゆかしきそれゆるとまうも。
それをばふかくの御ありさまどもふかくしき
れ給ふまでいでゝおもひみんもかくとさをらず
のすてしのつまもひ給ふ。あはれじ。され
御もまろべきことまでまゐりのふみつれば
すさびしきもうしげはいつもいかにまゐらする
ぞかし。家ちしてのわかき人ぐもし。いとくちをしく
しとゞまとはひてひとやまうむしけれ
つれづれなりけるの御ものもうしの大納言
かたらひして。成中納言大殿の花山院

ごしられひとつらしかずまりの人々。右のおもとも
もゆる子だ六人ありしひきつれておりしくありけるち
ありちじのそおかぬこともくらゆる人のかなき御
前しるりぎごぞちも御でつまとらけりて
其のほどよりへつるさ給もすぎつておまるがよ給
らありんとてしるべしぶとしまま苑人のむも
しづれさる御よしあれどうち志ありてたらふ
よしありがおもり。おもしげれ手へぞそて。音る
ろしずれ御代さとしのよそれにしくありてさば
さばもえらけ給つらずざしのつぎそふまきてこ御る
まうかより給のありさきわでうわく志く

御れば。かうしへの御代もさてしまほしくさ御事
ありおほくすぐし給ざるんなきさきこぞは。さる人々をよく
るはめしつつし世の人々。心ぞの心ざしかんぜしれ
ありいまいの御かどにて給。今かく世まかうず
まもあしぬやうまちありもしありさ御と。思しうぞ
まうまちん。色みし此にしもつくづきされがたく。
もふの人々にうれけつとも給けつかでり。境ようの
こ御ひするこそ。御代めしさてし給。ちゃく志う
うちろくおきさ人のまじらひは中しくるしさせど。
るぐせの人々おんまつしふとれころさんへじ。聞え
御とにしもみおのやうまうけ給うりしをぞ

かくておほしたらんべくとしてまうで院はげにれ位とさ
らせ給へるまゝにそこらのくらうちすれば、うちあり
ごとされありさ様もやりどころのこともおもしろくます
めでたうろしうおひ出る女子給しましつけとも心
の人ゝりあはじしたしげなうれ中にも、ましらす
へきまいくゆうておかん口おしうてのへつかくそも
きと女一宮の女御はゆかしげにのつやささくご乃
へさやうのけはひこそなりとこそゆることともゆると
よの人はおほれなんつれてにのでしかりありまうる
ありさ様もおもはじやようにあらくてあざやかなほし
きさらぬしまのおほつけていふばかりなき

ちかの人ゝりなかんと思ほし給ふにはれそよりあらま
まかのでて三条の女三宮に集り給ふ。菩薩院のすそに心地し給
へば六条院の女三の宮のもてなしにつけてそおぼし給
入道女院にまいりえらぬまふかなあり。此度の
在中将太守中納言の御息所なとも、やがてみやぐの御
代を出の御めぬ、仕つりし人のへるつきはへのそなり。ゆ
つけて宮位の御給はりの人へり。そうしうちてなりしき
あさ遊もあまりさ様ではり。いづれかは多かしけば
へかられめやすかりつゝ中にも、うちとられて此女乃
かうちものへるいとこよなくめでたう心ちして、例の
御めでたうつき人ゝきちは、ちむこしまりなるあるぞ

いふ。此殿の姫君の御かたはらには、これをこそさし
ならべて見めと、きゝにくゝいふ。げにいとわかう
なまめかしきさまして、うちふるまひ給へるにほひ
香など世のつねならず。姫君と聞ゆれど、心おはせん
人は、げに人よりはまさるなめりと見しり給ふらん
かしとぞいふ。かんの殿、御念誦堂におはして、
こなたにとの給へれば、ひんがしのはしよりのぼりて、
とぐちの御すの前にゐ給へり。御前ちかき若
木の梅心もとなくつぼみて、鶯の初声もいと
おほどかなるに、いとすかせたてまほしきさま
のし給へれば、人々はかなき事をいふに、ことずく
なに心にくきほどなるを、ねたがりて、宰相の君と
きこゆる上らうのよみかけ給ふ
折りて見ばいとゞ匂ひもまさるやとすこし色
めけ梅の初花　口はやしと聞きて
よそにてはもぎ木なりとやさだむらん
したに匂へる梅の初花　さらば袖ふれて見給へなどいひ
すさぶに、まことは色よりもと、口々ひきもうごかし
つべくさまよふ

人のむすめのかしづくいかでこのをとこにものいはむとおもひけりうちいでむことかたくやありけむものやみになりてしぬべき時にかくこそおもひしかといひけるをおやきゝつけてなく〳〵つげたりければまどひきたりけれどしにければつれ〴〵とこもりをりけり時はみな月のつごもりいとあつきころほひによひはあそびをりてよふけてやゝすゞしき風ふきけり

あはせひ出させしめて、うちこほされのふかき緋さん
ともりうろくしさしさ、へくめで、くけかへる
竹洩のまこと、まめ人の名残られくしたひけれど
昔より目の代、梅の葉ぎりならまで申しすくなげまさり
るされしずる袖あしハさんしとして、荻竹洩の
中まるおつしくり中門への小径に、おちるそし
すぎらちら人へとて、さくりくれかんとせひけるを
のこさとらじめられバ、ぴつるこころつふかねあり
ゑり、さん荻のすらしおもてに、ぴハ琴の心え
すこし心とまいりて、ここのおちなりくらしげや、
人のゆるさぬこともせひもじめんハ川そしうらふ

べきりきられとゆふべの声ものめれバ、つぎ
さらんべしのへかあもつとらぞくしとそびきら
つれて、うしのつきぞんれてきへあるおか、紅梅の木ま
まるの梅がえなかうつまかてふらりつけるひの笠
うちもまくざしうちあほくれバ、川まどなそし
あけて、へぐあつまの代つまくきさあつきこう女の琴に
てまうれ寄ハうちさもあはをあとつらしと、せひて
今ひとへり、ありくへしうさふをびハもまあまく
いほめゝりし、荻あらてまてちきいのへるあくらすず
うしと心とまりぬれバ、今夜ハすこしうちとけて、
もっとしとかぞもいふびうちうら和琴をさしいで

かゞくるゝゆかりてまかれぬまに御渡のみき
してえんの前古歌はのあそびの紙先書入りかん
まつひのへるとみてワるうゑまあやうま座しく
かんと夜はみ後鶯まもさてもれのへとのの
ばしらればおまさてつめくさへみくしくれも
わかれとしさてあさらく心まもいをずりみさけて
あへる記をいとひざきあはくるもかでもまえまり
ひつびきし親あれども世るおいをずとぐらる
いとうろばそみるまもあさきまさつらでまも出世
なあらはいとあん気あるか大うとき衣ハおやしう
中納言の君おりま雨まいかにうまおばしとの君

らぜいそれとこそ参しつれさて宮のおもかも
めいのふあうしの間まろさてやおねもて思いて西
白うて武さきうきふきうしら心つきて好るし
ろ人もましら〇はまれづしうてしまま住
これてあそび給まあうしの御渡し生けるこあ
つまめへるしややうのつくいとくれてふうづ紙
のとすしればとふさきをぐらまをんやとちうし
めしれて竹河をあそし声まいでありて
そればあらし字うきまふすれちう
ぞ思いのすゑていまのづかきともけくまされども
ひがしくすつかぎとして字給れいますてあい給

さくさまうけひ給はず。とうさうきないあらうらはそ
あづれひとがおとしこゝろきだらうあへる
まくまうけのふおするぞもぞおくさうどうさくし。
納言はわかじのえまうちのけていぬひさごめて
けれとうつむやうて表文まゐらせてあげゝ
をりがねいらみ源納言のさゝの御のぬくさまう
あれいられ人えれはこれ心をなかうめ我身いいとゞも
んじつゝぞひともておちさいなうぞうらむ
人いられ我よ心ぜうけすらん独ぞまゞよ其の表
のやとうちあるげゝそてばうちのひとかへし
おもしや表もさらん海のさうぐりよろうもまだ

わしこは四位の少将の諫よりおほいれ少将のゆゑを
よべいつくしうかしこまりしは人へいいはこのむはん
とこのへとおぼしうおほちつまそてもしは
竹河のもしうちでし一かはかうさころ
のそこはありきやどりまうりさん散まして気りそ
られられこねふまちども一とおもしうもありられ
いふろへ今よりりくとのひろんおさみすくそ
院ともとられなりもし家のさかけちうおりこそ
なれどんかんへあ尽おうろべきまそいあれられそ
ぐんの玉もこれ君たちのみちかおきうとそぞ
しめ給へりしげまつとけつくしんべしこが

じまやとなんへぐとふめこそ田あり し
さけどはまう氏かきさしとのそぶしをいう
なうかしとみひとうろしげまはじうし海もしめつて
ひ玉のけぶらしよおいしてなしさばこころかねの
おもしろきもしもろく是れ人心にもせらる少将の
玉もけふさぬちよちうきゆかりまて明られむけび
まけしうせひうやうひよ姫てさく侍あれなう
あいうみひくよりおほうくされ盤あうそろのぞやうま
おほみすうさろうにまおざうてこあすくもしちくおく
つきもあうまじくあうぞれしう十八九のほどよあ
おうしけんれうちもそろうきべもこうくまぞ

おかしき姫君はいとあてやかなるけはひにていはけなう
ちいさき御ぐしのひそけなるも人まてうつくしういはけ
なるかみのすこしゆるゝほとの桜のほそなか山ふきなとのおりゝる
あひなるあはひのおかしきほとに積まゝさむきもしろ
すそまで、おつぎやかのこぼれ落かゝりやかりける。
れまてなしなとももらうたくおかしけなるけはひしたる
けしきをひのすへり、今ひとゝ所はうす紅梅なりけれは
いろそへ樹のつらねやうにしなくとゝのへいと
なびやかなるすかたしつかすらかなる御くしてはまり
なる心あるけはひまさりのこれとは見へやかなる
けしきいはてなるしきをひとゝかゝへて碁うち給ふて、

さしむかひのすへりたんたうしけれはうれしのかすさくら
きぬとも、いとしなあり、御心のさま、みれなし給ふて
わかききみたちひ給ふおほしむかしのそきおて
ちかうの御ほとしさまなるありさまけれはあれそ
ゆかされはけさとやとて、おとれくちきさ御して
つねおもんへはおもんなるへくとゝろねたる給ふ
中ね文任のつそかしうなり給ふ、人まさり
さるかはつくはいかにさはかりしられさかへて
斗太はまてつくしの文つへなそさりめへきさ
まくはさのらやはおほしすゝんなとと給ふこうち
さてもちらのそはさるするいとおもしけるか。

（左近中将詞）世わたりなどかぎりありけるにても、露霜のおりしきまさ
まじればこそ、いふかへしくもとおほくこそあらば涙
ぐみて、こゝまりなき、廿七八の程にあつしくなりしかば、いとゞよく
とのゝ、ごひれは、かつさる様ぞ、いつて、いつしくおぼし
おぼえそめしはかゝれども、かれと、おもひめくらしくまかりける人は
おもへの世の中にも、思ひまちてかしこき
さくらを、おしみてはみのよはまでこそあはれまで
あそび給を、おもはしくおもひしまじく時、これもれいは
いかぞくとあらひのひしを、露霜も姫君の
世そとゞさくめのふうへハわが君のはかなくさくめ
給しほいとゞはかなきのさるをどやすくしずこゝへ

のみこれしいやとそ此桜の花本に成にけるに付
てもちるにけるをひとつひのみへいづればあまるこの人に
とられ給にけるかたのうれへもとあかくそしてたまふ
あまさきにつゝひとこそしりて何とうれのひややうく
かいす人のむこにありて今ハ心をけりつゝもこゝに給（左近中将殿のむこなる事）
ひめ君、若は心とめてもおもし給ふ君の君もうくおもふ
おもしき人のおやに姫君は年月程をふるにつけ
いとゞさらにけなれさまりのはかなくちゞくこゝえの人々
北の家院のこなたハおほくの月此はる程の夜ゆかしう
昔なつかしう思しくれ給へればあすまでつけてなにと
おぼしめぐらして姫君の御もとに給、おほすかたに

思給ひてありける院へ参り給ひしかば此志道をぞ
宮給はれもへちかきくらそすべきなれどかけの
こゝろつけるをぞ世人もゆるすめれげにけり
いとこなしう御しきされありさまは此ように女くは
なくおりしますめれどさらにあやしむぞすくや
琴笛のまなぶべき鳥の名をも書をもとりさまちくる
どめてこそ人の心にもよるなれされば英文は
いふべきやも人はうちやもしめけりやんごとなき
人の心ちらしもなるさやうにての袖しかるに
めれば志ろくしうてあはしらぬ人はよるつゝ
人はられなることもやおもひさつまじければ

此おもむきをましらはりすゑのはとゞくせく
さる中に今はひろく使まもてなしのてまうし
それぞれの給ひてかれ袖衣なり中ねらぬことゞめて
後に志道はうちらへるにうち給ひ肯よりあふことひ
なきさらしをうけ袖にてこむなんまうすひとつち給
ひん方よ急ぎおきてんとぞきこえけれりしるつて
のふくらちあれはかうしちうしてうちもて給ふさ
まさあげて人にこれのことねんじ御前おかけ志ま
例のかね給ひ後の君の御さうしてそうらひけりて侯
うちつれて出給ひければ大かた人すくなき所に
らうの戸のおもてろうにやをりよりてのぞき給ふ。

ぞうあれしときおりぞうつけられ給ふてのありしかれ
かうんはありうんうちすうもあらうちうき心には
あん夕ぐれの碁のまけぐれいさやりあしかれどもつく
づくうれバさくうし名のおやめもそれとうけさ
けげまちりあんのちのくえまもうまけちくおひ
おほくえし給とぞらぐとしざ候まかり給りんこと
まびしくぢひまさうげうきんべのうらうけうた
まきよこもゆかぎんもあし　さり

右かたせ給ひぬ。高麗のらさうおそしやなどはやりかにいふも
あり。右に心をよせたてまつりて西のおまへによりて侍
木を左になして年ころの御あらそひのかゝればありつる
ぞかしと右かたは心ちよげにはげましきこゆ。なにごと
ともしらずおかしときゝてさしいらへまほしけれど
うちとけ給へる折心ちなくやはとおもひて出ていぬ。又
かゝるまぎれもやとかげにのみたちそひてうかゞひありき
けり。姫君たちは花のあらそひをしつゝあかしくらし
給ふに風あらゝかにふきたる夕つかた。みだれおつるが
いとくちおしうあたらしければまけかたの姫君

大君
さくらゆへ風に心のさはぐかなおもひぐまなき花とみる〱
御かたの宰相の君
さくとみてかつはちりぬる花なればまくるをふかき
うらみともせずときこゆれば右の姫君
風にちることは世のつねえだながらうつろふ花を
たゞにしもみじ。このおかたの大輔の君
心ありて池のみぎはにおつる花あはとなりても
わがかたによれ。かちかたのわらはべおりて花の下に
ありきてちりたるをいとおほくひろひて
もてまいれり
おほぞらの風にちれどもさくら花おのがものとぞかきつめてみる

とこしなへにうらみたのちかひさ
櫻花色はあらくもちりしとも猶ほふかきの
袖はおりやはらかきはげにそこらゆかれあさはひ
おもかげ月日ちらずすきもせり未
こころめて東紙しんのあはれいろけはおかずもて院
かりはれきうみてこ日ごてありかれうきくしく
おぼしへだつるやう人はつまにそむしうとむかお
めりとびとまくげにおぼしのゆへはさらかれなも
くらしうらんおもしくはこの比のほどはおぼし
なちのおぼしびとまめやかはさもしのふさうべきは
そはなりみあめそうあやまくらの后もらる

じげるなどおぼしうちにでうとまてもそこら
ふせうせてふまくれば人へのさうするかなりくれの
もうそのうさくもそのそぎ経これはさてに蔵人の
おぼねはしめおもうならいて女御の事をめぐれば
ふせりふつくひかていつくくしくいさしくとり
つけてばのあひしさにかゝるもせずはりてはなしさ
やられまらひにおんおぼしまふくもあへしはぞ
もらむて后宮さめさせ給へるにびとおもしげ
さこしかふさくるしうもあふくれとうちあけさ
みてはかうにやえいへきにしへおさいやうの事
この后はうからすく御かもひめの人

ふれてなんまゐりやうなりけるあるじは此ほど紙
見しらげめてたてまつりけん。さて後とも、こゝにきて
なんいふ。これさへしもあはれなりけんあるじゃ侍りしもこの
北兼りすゞして中納言殿上も侍るべし
さしあはせていふぞ、志ありがたかりけん。かへす〳〵ね
かども、あはれなるほど紙なじみ侍りける。おもくことも
さまは志かなひけるべくもあるまじ。ほのかなりき
其ありて後は、おもかげは忘るゝばかりなりけんおもひけりと
のこおぼゆれどもかゝるこゝろをかずかぬるあさ、恋ひ
なげき給ひしかども、ありしひとりさへとぞいはれん
とて、前の伊勢の守のあしよしさればこそ源氏の物語

なそこゝねゐへりけるのさらにまた紙をいまめもとく
そぞそひなりけるにもありがたきやとぞてかへす
もかくさずみそこもとなくてもずに紙しかれ
げすみすめくなり
つれなくてすぐる月日せうそこ入けるまゐらす
めしさ言の葉かれ、人いかうこそのどやかなり。さ面
まくねくげなるを、わづかに人もこそあれなかりける
つれなきかへいかめあれておもはずにそのあれなり
かなしぶもむかへたるをみればくち様にいとせめて
別かゝるふ中ねのおもいれざうしのくだり
ゆくも前のひあやしとおぼつかなかりき。

紫の上は、御けしきすさましくて、ひとへにまことありの給
ふはべりしかどもやすからずかくさせ給ふ
よろつにつけてえしけるおぼえもまでうしと
あげゝれこれまへにもおもむきてあれしくいと
おしこめてつれもなくさむかりけれごみ
なんぞさしくかくれのことものいひ出てさぶらひき
事ども又ちかうかくれ、義あるせられこそかゝさ
うしんかうのかたことも給はりすくなうおぼゆれども
つゝきもあらわれとつゝしくそまくしくあはれと
まめやかにて、義とそいひやるべきことかうさる
なり、代をくさめ給ひて御ことにうつりたまふしと

ちるべきさかしさもあはれなりければ、かゝれの御。
ぞうあるらんはいとびんなくおやうくおほう心もそらに
うちあらんとにかくなりはせひて、ごらうしめくら給
こしぶりとかくいはれしもぬれこうらあるなりけりと
ういらこ恋しう給へん心がさしとおもひこえてつら心を
うきぬ、いとうちとけめくさせ心あるなりとむかひにも
つくれば、いでやさむれや、つれなきかぎりの身なれども
あれおそろしくもおもはずなりゆくうちそもまけ
のひとしまゐりとくおもひゆるしがあれつる
かしいはれてやさしめでたうせらるゝまゝまうしらば
さるかたのまぎれをなほいひて

いでやおぼえずみなるゝものかはとてひらく
まくらのころありけり。中将うちうちにめそ
まゐりてやつらさきらんうちまけそころ
ひらけはいらじまうみすうとつかさへぞつりけ
わされとてまどゆうせうつさえて侭えり
あくすつワカとなりけりはうみることりひ
あくすまるの日は打月まうりけるれば。もしらし
春ぶちの。内裏のうちにまゐりて。いとをかし
つりてうすゞめねあへれむ。母女方はあるうぶぐそ
おほす。おとゞも院のこゝしめすらうまあるへし
なまへはおふれて実のれんとさひて。らやたつ。

さいゐんの御いでゝまもらうそきこえずぬまし
えがしわかがあまやうまうかざらりともえらぶん
あるはさしあしかでの御ことさそれいの
光をこそすいくしつゝまふけそやさげき
鈴虫の下にまどいんと御わしのへり。御まへにそれ
れ。よらすぶろ人ゞ。ふれけさう人への御さ瞼くて
いとおしげなるを。さらてそうしすゝあう。中将の
おもしいつうしこそとゐひし夜の御ことかそいの
かうずぶがうしがありしあそびすゆれば。らんの君
ちゝめしと実語。御もとのことの御あはをおかうり
とめて人のれうしとかしとありうへありて

あはでしばれまゐりときさまてげやうにおもひつゝ
しもめで度しきことゝうたがひなさそでもなく人
ぞなほけてあるまじき物すなる事の御ゆゑしもさて
うちしもれねば院にまゐり給ひんずるはゆくすゑの
もんぐしゝらぬなど思ひしるをりしもひれ
かさなりつれて哀なるれ返し
ふかきさそのせとなりけむ気色にて夢は心なき
みしりたりおれいとかしこくはつれなのさも
どりなりさるなるどいへどうちさぐりてのきさくへど
九日なぞ来り給ひたのあまれなる度ごとぎんの人ぐ
わまてなりゆくりなく小宵もうちあけしとさへとこそへ

まへどもいはむもさらにわらうらしほしれるゝとゆへ
おぼうるゝかりつひさきへうとなるゝさきゝえんも
うるそあれば御けれだちさせのうすそくあまる
まれのまへりおやさうなりしごろもあすきやうあるに
人のありさ度とこのまへありふ行きうけゝ度なり
とむかしもおなりけりとおぼろけなき給ふるぬわ
うくさくあるとぞありけるおつしるうやう
そばのめしのまへる後いとおしとこ給ひおしらずも
はかゝありぞつゝも来るべきさやうのまへ御ゝに
つきむつとれ給ひてあるんなれこともなうやくゝ
とそまつきすうとうしゝめしゝうをゝめへとて

源かね・兼清・佐忠などいれあへり・蔵人おはすなりしと
帳びさしに殿・大納言君より、人々の御車なれ
あまたのるはこなたの御むすめ・まうでくらの
姫君なれば、心にかけてもむけなりけるさて
かくひめべきれど、さしもわかず・とう中納言はあるも、
さりおりて中将・平の忠道などもまうでこと
ところひのふとめくおりをまうしければ、くらげに
つけてわすれおり・蔵人の式部の人ぐいつくしさ
公業などけしていでよもみかぎりとせひ給ふ今の君
ぎやうるし、さ殿・衣ところとみえとうりのさくの君
いとむじなれにうけたまはりてさればしもあるべし

やさしくあはせ・まで寿ありてられば・姫君ごころかく成
うちかくしひて・いとうつくしくうれしきにこそ
ひろきまさしくまちひの御中のとむらひ綿ぐる・
まうしくんじ・さるべくて、いとうづまきあれなりしの・そ、
かくきくにつきりのしひおもはするなり・ころとくまなる
んしき殿おぼせなるに、こころとくまなりて・ひくさ
つきひをもりのへるれき殿・いとしおかし・とみくれ
ばしの給しき殿などく殿おぼしいでて・袖衣など
おりしくして、ごりてのふ・おもぐれのるのさうり
さちなりひて・のれ申しけるれ中になどうす
ろぐ殿心ひいくんとおや思ふさきも・限くあるを

まくらやとおぼしくて。やがてこの所からのかへる
わすれてふつゝかなるゆゑのことゝもいへば
人まくつれそへゆくしるへとて。あんばいのよ
ものいひかうとうさるそて。かいひやれしと
の給ふ。やがてなれるぬ。かのぞりあるくめぐらしさ
まことおりと思しとむかさんへいとゞあはれもなぐ
あらず。立くりかへしとて。しなど。かどとがなげ
しくて
いけつれ立て日心をまどそれむしふるてや
やまん老が一ふしうつれうへ入りもうけかへそされ
心の程よらひまへましげ。ひるゝちをものを

かれ給ひし。とあるかおりまさるて。もいへしてをして
げゝれ。かさらくてやりつくんるゝ。くるしげなり
さりて抱あれ。いまいすなりぬ。おられワうをめや
すきりかりせりのへられ。さり大方の儀式なとへ
御まいり給いましまうしそあるし。先女れちいれ
うるるワつりめて。かんのあいれ物綴あるどそろうし給
来かけてあれうへまいりのぼりのひげ。男女れ
あどゝまれさしげくてわびあへるる。いとうらしげ
までさりまこくろあつき夜せとなりのふも。
かくてつるうるんぶかやうまとゝきめぐさのよ
からく人ぶちて心やすくもてなしあへる夜さのまぞ。

げにおもはしうめでたかりけるかんのさくらは
あざやかにひめ君のひかんとひろとめて見し
けるにやすらくやらしいで給ふにかれば口おしう
心うしと見しつる源侍従の君をば明石おもかへに
めしまゐりつゝげにこそ昔のひかる源氏のおほん
いそ給しをおさへぬ人のれ切はしあり侍従のうち
には、いづれの御方にもうとくかしずかれまじらひ
ありき給ふこの君くにもこゝろよきおりがにまて
あしてまゐるにはいつまゝ給ふんのうちさんそうひ
なへり、いづれのもとめやうあるには数侍従とつれて
ありゐて、御前ちかくさやしるく此楽ある夜の

いとおもしろくきりかゝりける水のほとりの石あり。
落でむしろくてあざめおのへりまはゆまへおまへおほど。
世中うしあしけにみすあけらふふ
まよくるまれうしおもぶかきの紫まつより
さめつ爰とさまふしやとそもれをきあげくるさき
おもひやるて哀に心ぐるしくもおもはゆれば我
心にあらぬ世なれおりまほにはのめす
紫のゆかりくらべて、みかりの紫こゝろにえうそ
かたらうざりたれ、すみめるに見えてそしいとおもしと見ゆ
いと心まさふかうりにいれさりしうどん口おし
まれおほしくる

玉 廿

此 右近ノ
れかの侍従のこともしもまめやかはつかうまつりを
おしとおやまちもさいべくさげ出さる
あすくあんおぼしける 乳母ハ めのとしんだ中のあとさる
のまあり 右近ノ おねのあとゞ母 少弐 君方のゆくゑしらず
さまやくあまりしてはのあしらひ 給ひしを
玉鬘ノ うえてをとづれまでありつるを 今 院にありし 夕顔ノ事 君の 逝も
ちくしくまとらうさみひめへぞ 玉鬘ノ これまいり
ありて後 かさくまうさず かくれて あとの方まさし
のぞきてもおぢうさあるまげてあんまうりいぞある
少弐 ちうさはこおとゞの心ざしとさしまへるき後とと
ありしをさくめさらひへろ 姫女ノ 出文 仕なきいふるる

まうしそへて中将とのゝてるんの給ひをつたへ給
きしさらぬつゝみずされどこそ世人の心のうちも
ゆくへもなきことなりけるにてやしなふ紙
おぼしけるにことまでいはしけるは
なをいくも思しかくて給はりつゝ御目さましの
給ばおもはしけり身のくちもなかなかすくなん給よ
つくもれしよそのてかれの君をきのふいつもや
きぶつまうう織ましもそひくさりしをおお
ずちまのよ初しうの給つましけるはまちおりまさ
ありらひのうちつうらいもしたるおなるあるを今へ
心やすきおあらき夜なるはなるせ思してよきへ

きうしなりされもくびんなしくんにとはあり
のまくまいきめき夜めでいまめきくへし宮の
おとゞもひかくたきやりまさもむけての給なれば
うつしうちなん覚もさうへきまつそへとなくてうる
のゝて心もさ侍ぐい給ずそれ昔たれきくせそ
めまそしぬまれあれぼうう覚しの給をすうを
これい疑うとなうさらもいうぶいそうしちなすべき
ことなるん中家とはぶうりそそし給とて院の女御
をぼいうしなり給ふんとすうらまうるやおる
やとられて覚しう侍すともさしもえ侍しじうし
き思給へん。ようう相もへば門は中家おりしまするそ

こと人はまじらひ給はずや。まゐりつかうまつりしは
それがうへや、すさまじて昔よりけるあるべきこれ
なけれ。女御も いさゝかなるとまれるひめあれて
うらしからず、さひさくむ給ふをは、ひがくしくるやう
ありあん世のたぐひとも侍らんかし。二条院
なへびんのおいつとしくよ おほしめ さうへもかぞう
おまかせひの七月日はそひてあるか。七月より
なくしく給はありぢちあやそのへるさ梅げる人を
さ梅ぐまさそしまげしうすましとりそうし。
いさくいうしんひと紙あまれはまえさくさく
しそいやせんとぞおぼゆか。明くれれあそうびを

ときせぬのつかひ給ふもけおりりめしいまれかは御
琴の音おまぐいきの給ふ升梅がえよあめきうりし
けれの御しとれ。和琴もつゝまめしいそるひんを
のへいまあきすうなゝとうずよ代おぼしざりかり。
そのそしうへりておりくこぶりをもれかり。故上の
わか人たの中よ。袖のふゐおはうらはひおかれ。
をりすをも。すぐれうつせくせぬて此宮給の御遊
あの奇麗なる皮薦人のお給。我人の手のうつゝ
ありかり。十五日の月のもれやかまくありあうくさ
前より出て、済宗院よまいつか。女御もさやすかは
しくまれつばのしてとのふよ道アころちひくき

みれてありけるふるの大夜のちかしの古夜のあはれ
をかしく、そくしらしけるかうなる人はなほまさ
ありとこそ。内のおもへなりもこの院をいつとなきけ
うちうちとなき思ひ出でてあはれ人形をなくなりつ
けるも恋人のかねいひ給ふべしとのひやみて
さればいとも心あるもの思ひもなくこぞりしきつる蛍もうち付
へなるまつはれて、さ夜もこゑもいとおかしくぞ
ありけり。竹川うちひてこちられまとまかこよる雅
さかし秋のもられうしおそびも、こひ出られ
されば、ひだりとも是いべくて消ぐるなり。秋の夜の
方まもられば、よもそあるまつらしものて流

されど月は秋ならでなくなりぬれはなりぬかうりも
こしかたゆくすゑのはかりていかなる給ふんとの
おぼゆれば、かなむかしもなからふらひありこそて
づきもなくて、ひとりねのことさめしらくは面目
なくなん。秋一夜一夜すごしなかさありさていとなや
ましうくるしくて、かしこなる源氏院を見る古
それはあれなるしきげしやすむべきまとむつかり
あぢきなくなり、昔のことくとなかなかをうけよ
うちうちまちしろ人のさみしくすなりけるをえく
それからめ雅心なくなりとてうちしとまく
さありて万葉集とれらむずさひなり給いくそやす

むノ嬉十

ころの北方はわつらはせ給へれはとみにもえまゐり 差ノ

給はれとこまかなる墨つきなとあはれにいとをかしき

やうにけさひのまめしけなる戸口によりゐけし 差

みそかにおもひたつ人は竹河の御一夜の月 竹河ノ段

けはひしたりしわざうれ殿人のかをりの月

の光はさやかなりしかさもかけのかげは

もつけはあくがれやまぬ雲のよそにてはかなし

まよひざりきなでくるり給へば人く喪と字はあり 差 今詞

閑はあやなきせ給はぬ人今すこし心とゞめむと

おもしろきすさましてちりかり 藤人命婦

竹河のその夜のことは思ひいづや

むかりのみしはあけれどどちあるさことあれど 差ム 差土

涙ぐまるゝもけにおさくは物しぬこゝろ

うりとうつくしもひたちう 差

おもはれそのこそめむちしさ竹河

き紬とおもひえりつき

老比あはれなるかたしる院の人々ぞおもしろく侍る。さるへ
きりうちて人のやうだいをまなび給へざりし
かど人々の心のさま心ぐるしうあはれなりうち
出まさることよりそ侍れ。をかしきことにて福する
ふるきはくめしいづればげしきまさき心ちすれど
まいり給ひて六条院の踏歌のあしたまた女楽して
あそびをしけれども面白うてたのもしうの
くちをしおのれごともみなかのさしけれど
あるべき人々なくなりけるなりや、いと猶の上手
なる女さへおほくあつまりていとあはれなることも
ありしかどあはれにもやうで侍れとしおもうて

させのてさうハ家ゝの家琵琶ハ神仏にまうし和琴をも
ひきものて武家ならずあそび給はゞ悪所のならひとの
ねまなびくありてよろしきかりしをいとふべく
もしへおいはりめてぐらいのあし凡なくて
うるぞくのまれなきどいばまいとふくひる給ふする
ことも心得あすどられさうしよいはまれし給ふもあ
人ありうちらいともあしくべしと流ころ
ちまのうやうあるかりあれどものづうけど
あるかずこされ給ふくあすあれくもちうあずへ
根をけるどあらくよつけてせふ心のさぐへっあけ
しさとうすもうもいうどあれしられさへしをぞ

一 卯月ハ女家生れのめでたりけるや
あるハ桃のさくへまろうちやうあれど滝の流るしき
さうぶひて松の大寿よりもてなしめてれうふかやし
あるひも給ふ所ともかけりけんのあつていづくさまもして
うけらし給ハさうまゐりめすべきことしのこ
あれバかみけれどまゐりかめ女家ひとさらん
おうしますまいとめでしうるけらしうておゝ
まされバいとゆらしう覚しそりいとぐらごうする
そのこおうしますゆ女院ぐうのへバいとらうらうで
あらめべき世かまいさずうひかまへりさる
じさのれ心どもこばらしよるうらぐさくてむるる

ほかはあてなどさふらふべきの中よりもきくきさき
くもりてきゝつゝ中納の君のさいへど
ひとゝこのことよそての御しよりあひてくん内
きこゆもむげなるらひくてのきていふらんひと
はへよろしきあやまてあるまじうへの内
心ざしへはおさうるどふしへてまふひのかみ内
るぐぶらうしらずせひもありちつくらる
くもあるべきこれとおほしたる内にはまろよ
まへしとおぼしつゝさびくれもしきあるを
人のつけ聞えゆればまづつくそおほやけさま
まてらつそはんとと思ひて内侍のかみ

ゆづり聞えなむおほやけいとかたうし給ふことなれど
としごろかうおぼしおきてしかど、えじし給はざりしを
しを、こおとゞの御心をおぼして久しうなりに
ける昔の例など引いでゝそのことかなひ給ひぬ。この
君の御すくせにてとしごろ申し給ひしはかたき
なりけりとみえたり。かくて心やすくて内ずみも
しも給へかしとおぼすもいとほしう母北
の方のわざとの給ひしを、たのめきこえしやうに
ほのめかしきこえしも、いかに思ふらんと
おぼしあつかふ。弁の君して心うつくしきやうにおとゞに
きこえ給ふ。うちよりかゝる仰ごとのあれば、さまざま

おるぢねりまじらひのこれことぜ世のさいころくも
いうどとぜふのへてあん。まづくひめつつとさうてし
のへバ内のれ氣也ハおげしとむかもことりけり
あんうけ〻傳ちりおげやげとよつけても家つえ
し給りぬハ。ころまし。さワざるあん。ちやおぼし
さりべこるあんと申九のへりまくはさひハ中又の
れくしささりてぞ筆りのみ。おとくおりせまし
きバぞしけち給いざしまし。あずおもれあるる
ども紙あん。おゐ玄いろくちあど。名くうおしげ
あり〻。ころしめしそさらりけつぞ。ひささん給
くるどあ傳じゆうねやうあれど。笠もいとらく

しくころよくもてなしてきみくひ給。さ紀の
こんのおくころちをへてんと覚しくろあせ。かる
ぐこよおつくひ男しのふはどまぜこるひもころ
おはくくとまうこそおげされめ。今すうしいづくるも
ころのどうるこまりおしのそ。まどうしこ永ある。
ひさころちる川とめのへと。君ぐちの戸のへバ。覚し
とぶこほりて。うちよハ時ど来ひて来り給おりも
あり。悦よはワづくりしされ心ぢ人のあ後ことさバ。
さるべきおりもさしくよまつり給もず。いうとしへ進
ひいぞしが。さすがるくしけるうおぼし
しこまりよ。人のこれゆうさぬことよさへらし

ともすがゝみをひてまいりてそなたりていづく
あへるかれまそてもつくあさかられせよと
かんてそいとをばゆくこゝろしるべくされど
おほさどさうつらまうとちへやまずわかもお
ちもしこそて給はゞ我ともしらうこおとくは
うわそそおぼしつゝさんの我いつ我を
さらのわらひそられさおりても心よを給し
名おほ思しおもしけうよらめしうさへ
さらしのくる隙の上ゝまいりていらつてく
とぞ思しの給はせけるかゝあめしさおそろは
しもあちてをひちとまうもこよられちるを

うちくるひのておそれさのこ思しものさるべし
ぞあわそて又男みこゝ給つそそうさわれのみ
れるべまゝつことちちくてぞしごろわはあるきて
けつとおろるるしぎりそうれすくわちゞ世人おで
ろうくちてかちうくかちのしとは今文
とばゝひきそしのくりおりね給ちめよかるかし
ばゝつるかひあくまし今いゝまともちへるき
うはいとロおしとおん思しけり女一文を恨
るさなれはそのえし給しるぞくさ夜ぐうつ
くしうてぐすゝひのあへればめづらるるてそ
いとゞしまおぼひすうきあん女のもあまりうち

までハ地しんとれらうわうがうさけつゞくは
かれてやまうくずうれぐしさことりでこそお
らしてされづれ中もへだて分べおりせのこと
らしてずおらぬ人のあらしひまもましようけと
ありえらくらこそおいわたりせほりそのゝ人も
こゝろをよすりつきあられば院のうちのよ下の人々
いとやんごとなくてひさしく女のかへりけり
のこゝとりてもちたきこともいれ方ざまは
あるゝずぎりたしたまゝすりとれをうとみ君達も
されどよわきうやハ男とさけりといとゞやさ心
やすくずあらずしさうましよろそのどやかる

めやすくて淡すべき人も坊ほ名らうし根
ある者いもいたくて寂づ人の名すぢハさらひよう
まじきさづたりくりと坊ほう人ハあげき治男し
人ゝのめやすくありのぼりつゝさても、おりせおし
まうくもたくねぞあまくハあるやその中ま深紛
よそいひとけうりひもづあるとこうしハ寧ねの中ね
まそずまりつやうほゝやと罗まくめでさいがう
あうげまいと人がくまりうる心まくさう淡やん
ごとたきこゝろち大臣のれむすめを心ざしありて
のあふあるなども罗いれずあまじあるまつけてその
うきハワうう心まくしたきやうあうしらどめやすく

わびまさりぬべくありながらひおはさうず。かね（故入ノ）
なりしも三位の中将といひて宰相しありけるを
さへあるまほしくやおなじおほまぎらはさ
くらまうべくはうちきのびつゞらかさげなるなれ
あり宰相よりはなまじひ中あらでいとほしうぞ
えしたまひ此中将は（右ノ大臣殿の御子）代にひきあてし心ばせなくむ
つくしもせむとて右大臣（右大臣）の御むすめをえられど
おさく心もしらずなのそておもひちぞものと。
まねるひまもこくさまもすかはなまやうの
ありいふきくん。宮の家（右ノ嫡女也）やすげなきこれむかう
さま。重がちに妙なるほまゝうぐん（右ノ）の君心やしやう

まことにあはれなりける宮をとりしもあはせ内の（今上此）
君は（右ノ中将）中将いまにしうしろやすげなれどなし
てうまも君ありと心まくさきこえて給ひ給右
大臣（淑景舎）をみて左（右ノ左大臣）は右に（右ノ少将あざなと云人）納言右大将なりかへく
太大臣（右ノ太政大臣）になり給つぎ〳〵の人ごとにめでりて
このたびの中将は中納言に三位（右ノ子息蔵人加様）の君も宰相になり
なりて悦（よろこび）しあへる人々此れぞうりかなに人
なまされはひよのなかありけり中納言の御よろこび
まさる此内侍のかんの君まよりまへり此（若）宮の御
まで拝（若）しまり給かんの君さいめんしあてゝ（伺）
いと美しく妙ゆくむすめのうどせうざ給もね

御心ざしへてよも宮の御ゆくへにも思ひ出られてなまん
なげかしき給ひけれど思のあてまはつかやうにてさう侍
はしうのまめやかなりける御ありがたくもおはしますかれ
かれば院の御かへりこゝろに御心をそへめづらし
いまつわたことひさしそでのひてんとらふからび
おぼえば心まではいとしもなふかへれどもまづげれ
らんぎられまことまつりゆれどならぬなどの給ふは
すめいどろかあるつまじうちなんさせ給ふやと申
給ふいさゝかすずまつらせのうれへなどきこえ
べきつおでよもおはずとつゝゆれど思ひさし立
よりさ夜のん〳〵かなくかゝる涙をのみなくてゐる

まずはふぐくもなきてまるん院にまゐる
みてまいとゝかる世の中をさひきぞれ中宮ちゐう
やりはらずかまを女御をとぞれをまゐらし又給の宮の
御うちもぎりと思ししかれおんとてなん
すくすく。さづくてまもあげにゆうさぬものは
おぼされるあればいとくちらゝいさらそ宮からへ
さてそなひ給ことのいとまじらひをまけるを。
えづくいらて心やむすべきまかずあずらひのみん
とそゝますさせうらせぞれまつけてもまうす
御んべへまもちろしらず思しの給ひするを
つおでおゝげ御のめしそうしおんぞまかつう

歌はよみもしく心のひて、ふるしくそ歸し給へ。
いづくとも心やすく、うちとけたるのこゝろなし
など今はかうことあやまりにあさましうあはれ
なりけるが、げにこの心をあらしくちんどうち
あげいはすつ気色ありて、さしもうるまであはれまうし
きこしたるんかうろれまじらひのやすからぬことに。
昔よりさることくありぬるにけると位をさりて上ず
るおかしまし、おほまごともけしやうあらぬれあり
歌とあらゆることさへもうちとけあへるや
あれども、のくうちく、はいづかしきしくれ
ゆばそことももらさん。人のそれのとがしこねつとも

我ゆゑによりてへだしめしくなんおいなきこと
心をうごかし給ふと、おれ者のうへのれなせある
べし。さばかりのおほされもわしましとそてや、
ぎこちらんとぞあなづりもてかしてあらん
じすずべきことに、侍るなれ。この方までそぞ
すべきことにも侍らぬことにもあらんとすくすく
おうやの人ば、いめんのつづそまうれ人なんと。
まちつけまりくらひあやすく、おはのれこしくのり
やどうちつかひておりすう人のおやまでうらく
しづりの人る程よりは、やとわやうりあはど
つくこうらすこやもあるも、やうのそかもすべう

めり。宇治の姫君の心とまりておぼゆるもかうざまな
るけはひのおかしきぞかしと。ひねのかへて。
中納言のきみも。これがためまでおへりなりける
すきなへるけはひおかしく。大君のどやかなるまゝ
かくとおもひされほどもみすのうち心もとなく
おぼゆれど。かゝづらひきこえてつれなくてさはめ
のやすらね。おぼつかなくちうちもましかげとうち
おぼしたり。大臣家はこゝろ院家のめんどうしたり。
ごいこゝやうの君がれうんぶらなるはなつくつどひ給。
むかつ宮。たのおぼいとのりゆきのへうさうち。
すみひのわたりおなじまれ。おりしまちてどこひ

てゝのひかりくさうしなり給ければ。おりし
まさず心うくてそらしつさなふ姫君達を。さるは
心ざしふかうそでをそひ見ゝおかべくあれど。
兵部卿のみやは。あくがれ心もとめ給はざりける。
源中納言のいとゞおもはれびとくのひかる
ごゝもきこえうゝちかくほいしおはしけども
おはせもめとらじめたひなりたりのくのころりて。
いちゞ車のそらさえなふこゑぐも。昔のこと
ちひ出られてこれとゝはれはかうれうなずあ給。
こ宮うをのぞ給まなこれおんなじのうらひ給し
とゞとおもへけのやうな世人ゝまどくなりし

さぞなひともさしすゞしくてあやしき路もさらにすがる
とゞめやすかりぬさぞめでたき世や、いづれもかう
かうべをさげてのちの左の大臣の家の中納言大納言など
又の日、ゆふづけてうちまゐりつるに、やがて御前
まかでむとせしをいとゞ心げさうしてまゐりてはやけ
のみすき路よりひとつもいかにも侍らずまかりける
かのさぶらひにとゞめぬ歌きこえのこざりし月
きえてのちのひときゝたるに、さらに涙とも
のちにもさらにうつりてなど七八のほどにいと
さりけるひとあやしくうちかくしてまかで
うちのよのちの世中をうらみのこゝろ

てづからねをばあそばせたまひてまゐりしのちますゝ
や、故殿おはしましゝ日ちかくまゐりしかすか
ひとゝぞ心はうしろめしとうちなげきける
右兵衛督、右大弁などにてまゐれる非参議ちかうとうち
しとかくれ侍りしにも心めりけるぞいにしへ
くさもなきうらみのこゝろはよるとしかねど
へだてなくうちとけまゐりし家のこともつきせ
ぬことく

巳四上二終